

名駅南から 地域の公園の あり方を考える

櫻井 高志



地域でつくった称宜公園の今
名駅南地区の北称宜(ねぎ)町には約300㎡の小さな公園「称宜公園」がある。オープンスペースの少ない名駅エリアの貴重な公園である。この公園は戦後の復興区画整理の中で、当時大勢いた子ども達のために、地元町内会の住民らが市に公園設置を要望し、かつお金を出し合って土地を確保、整

備した公園である。その後、市に移管されるが、公園は遊び場として、また町内の子ども祭りや屋外映画会などに利用されるなど、貴重なコミュニティの場だった。一方で地区内には労働出張所があったため、日雇い労働者が溜まるなどの問題を抱えた時期もあった。さらに近年では、受動喫煙とコロナ対策の影響で喫煙者が四六時中溜まり、煙は公園外まで漏れ漂い、タバコのポイ捨てが横行し、「灰皿公園」と呼ばれるほど問題視されている。

最近では、名駅南は都心居住の受け皿として、マンションが急増中であり、子どものいる世帯も増えつつある。そんな中、かつての子どもの遊び場、コミュニティの場であった公園を再び取り戻そうという動きが出始めた。

称宜公園を考えるワークショップ

名駅南地区でクリエイティブなまちづくりに取り組む名駅南地区まちづくり協議会(弊社も運営を支援)では、このような称宜公園の惨状を危惧し、地元町内会や学区と意見を交わしながら、二〇二〇年から約一年間で計四回のワークショップを開催し、今後の公園のあり方について検討してきた。公園の現況調査から始め、議論を重ねて、長期的な将来の目標像と短期的な具体的取り組みをまとめた。目指す姿は「称宜・子どもオアシス」とし、住む人、来る人、誰もが心地よ



称宜公園を考えるワークショップの様子

く憩える公園を目指し、多様な利活用を創出していこうとなった。その実現に向けた短期の取り組みとしては、集中清掃と舗装面の洗浄、花飾りなどによって公園をきれいにし、その上で子どもの遊びやランチ、イベントなど今は見られない利用を創出する取り組みを実験的に行おうという内容である。まちづくり協議会では、今後これらを町内会や学区、行政に提案し、連携しながら取り組みを具現化していく。

公園とタバコの問題

名古屋都心部の公園には、称宜公園以外にも喫煙所か?と思えるところがある。原因は、公共喫煙所が少ない上、受動喫煙対策による路上喫煙禁止地区の指定、そこにコロナ対策が加わりビル内喫煙所の閉鎖、コンビニ等の灰皿撤去などが続いたからである。喫煙場所が減る中、規制のない公園に喫煙者が集まっているのだ。他都市では条例で公園を禁煙化しつつも分煙ス

ペースを行政が設置、あるいは民間施設内への設置を助成したりして受け皿をつくることで対応を図っている。もう一点の問題はやはりマナーの悪さである。いい大人がなぜポイ捨てするのか理解に苦しむが、パブリックへの意識の低さ故だろうか。これらが公園におけるタバコの問題であり、多様な利活用を進めるには、この解決も並行して取り組まなければならない。

コミュニティとしての公園

称宜公園は誰もが使えるパブリックスペースである。同時に、もともとは地域が地域のために作ったコミュニティでもあり、結束力の強い町内会というコミュニティがあったからこそできた公園なのだ。利用する主体が増えた今、これから改めて多様な利活用を進めていくためには、町内会を中心に、まちづくり協議会や周辺の企業、新住民を含め、公園を共有財産としてシェアできるコミュニティをどう作っていくかが鍵になるだろう。まずは、喫煙以外の利用がない現状を打破すべく、「本来はこう使ってたよね」という気づきからスタートし、徐々に利用の幅を広げ、顔の見える関係づくりを始められるといいだろう。公園は、まちの豊かさや暮らしの質を代弁していると思う。コミュニティとしての公園が復活できた暁には、きっとまちも素晴らしい姿になっているはずである。